

令和元年度
横浜市立高等学校
自己評価書

横浜市立桜丘高等学校

<学校情報>

1 課程・学科 全日制課程・普通科

2 学校長 古谷 信隆 (平成 31 年 4 月 1 日現在 在職 1 年目)

3 学校教育目標

知育、徳育、体育の調和的な伸長を図る

- (1) 進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。
- (2) 自主自立の精神を重んじ、個性と能力を伸ばし、創造力と実践力を養う。
- (3) 心身の健やかな成長を促し、規範意識や倫理観のある情操豊かな人間性を養う。

4 教育方針

- (1) 日々の授業実践を通して、自ら学ぼうとする意欲を喚起し、考える力を伸長させ、高い学力を育成する。
- (2) キャリアガイダンス機能を充実させ、将来、社会人・職業人として自立していくために必要な社会人基礎力を育成する。
- (3) 特別活動、総合的な学習の時間、社会体験活動、地域連携活動、探究的な学習などを通して、豊かな人間性や社会性を育成する。

5 教職員数 (令和元年 12 月 1 日現在)

学校長	<u>1</u>	校長代理	<u>0</u>	副校長	<u>2</u>	事務長	<u>1</u>
教諭	<u>63</u>	(男 <u>48</u> 、女 <u>15</u>)		養護教諭	<u>2</u>		
実習助手	<u>1</u>	事務職員	<u>3</u>	技能職員	<u>3</u>		
A E T	<u>2</u>	非常勤講師	<u>3</u>	管理員	<u>9</u>		

6 生徒在籍数（令和元年12月1日現在）

年次（学年）	学級数	男子	女子	合計
1	8	172	147	319
2	8	184	132	316
3	8	175	135	310
合計	24	531	414	945

7 回収率

		依頼数	回答数	回収率
教職員		66	28	42.4%
生徒	1年	319	146	45.8%
	2年	316	84	26.6%
	3年	310	285	91.9%
	合計	945	515	54.5%
保護者		947	691	73.0%

8 自己評価実施日

教職員	令和元年11月5日～令和元年11月12日
生徒	令和元年11月5日～令和元年11月12日
保護者	令和元年11月5日～令和元年11月12日

9 集計・分析期間

令和元年11月5日～令和2年2月28日

10 自己評価書の公表方法・時期

令和2年5月末に学校 Web ページにて公表予定。

<自己評価>

1 第3期横浜市教育振興基本計画の推進状況

■魅力ある高校教育の推進状況

(関連アンケート番号：教職員1、保護者1)

管理職

取組	<ul style="list-style-type: none">第3期横浜市教育振興基本計画の初年度にあたり、魅力ある高校教育の推進、グローバル化への対応をめざした。具体的には「英語力の向上と国際交流活動の推進」として英会話学校と提携した「桜チャレンジ・プログラム」を1クラス増やし2クラス展開として、30名が年間30コマを放課後に受講した。「ドイツ国際交流プログラム」では、国際局、高校教育課と連携し、フランクフルト姉妹校へ生徒16名、引率教員2名を2月に派遣した。
成果	<ul style="list-style-type: none">保護者の評価項目「1 進学指導重点校としての取組が十分に行われていると思いますか」では、肯定的回答が75.8%（集計表6ページ）となっている。また教職員の評価項目「1 『魅力ある高校教育の推進』に向けて学校全体として取り組んでいる」では、肯定的回答が56.3%（集計表1ページ）となっており、いずれも平成29年度以来最も低い評価となった。このことから、さらに学校全体で授業改善に取り組む、進路相談において進路指導部・担任を中心とした教員と生徒が十分に進路を意識した取組をおこない理解を深めていく必要がある。
課題	<ul style="list-style-type: none">英会話学校と提携した「桜チャレンジ・プログラム」では、生徒の参加希望が多く、令和元年度からはクラス数を増やすなど、より参加しやすい環境を整えるため改善した。「ドイツ国際交流プログラム」は、プログラムに参加した生徒以外の交流の機会をいかに増やすか、毎年派遣できないか、より充実した体験・活動になるよう工夫等が必要である。国際理解教育を充実させ、本校の特色ある取組の一つとして定着させたい。
改善策	<ul style="list-style-type: none">教職員が、学校全体としての新たな取り組みや進学指導重点校としての使命を理解し、丁寧に情報を共有しながらチームとして取り組んでいくことが重要である。保護者からの本校の取り組みが評価されるように、「学校グランドデザイン」「教科グランドデザイン」を利用し、生徒・保護者・地域に学校の取り組みを理解してもらう積極的な広報活動が必要である。

2 教育活動の状況

(1) 各教科の状況

□教育課程の状況

(関連アンケート番号：教職員 2, 3、生徒 1、保護者 2、授業評価 9)

管理職、教育課程委員会

取組	<ul style="list-style-type: none">・令和元年度も引き続き「進学指導重点校」としての使命を意識しつつ、教育課程の運営・検証および課題の検討・改善にあたった。・次期学習指導要領改訂に対応した教育課程の編成に向け、分析や研究を行った。・昨年度作成した学校グランドデザインを基に各教科のグランドデザインを作成に向け、情報収集や各教科を通じての意見集約などを行った。
成果	<ul style="list-style-type: none">・「教職員による学校評価項目 2・3」の評価については、肯定的意見がそれぞれ 73.0%、83.4%と平成 30 年度よりは減少しているが引き続き高い数値となっており（集計表 1 ページ）、各部署で意見集約を丁寧に行いながら議論を進め、合意形成を図ってきた成果が表れている。・「保護者による学校評価項目 2」および「生徒による学校評価項目 1」のデータについても、「そう思う」と「ややそう思う」の数値合計は、保護者・生徒ともにそれぞれ 80.2%、83.2%と高い数値になっており（集計表 3～8 ページ）、本校教育課程に理解が得られていることが分かる。これは、入学前の学校説明会、入学後のオリエンテーションや各学年での選択指導、個人面談等で丁寧に対応している成果といえる。・「生徒による授業評価項目 9」のデータによると、「学習計画」に関して全ての教科で 90%以上の満足度が示されている（集計表 9～28 ページ）。これは、「年間学習計画」や「学習のポイント」を掲載した冊子を活用し、1・2 学年の基幹教科（国語・数学・英語）において特別時間割を作成し、年度初めに教科オリエンテーションを行ったことが高い評価につながったと考えられる。また、選択科目だけでなく、基幹教科の科目でも少人数講座を設定して、丁寧なオリエンテーションを行えたことが功を奏していると考えられる。以上のような点を含め、各部署・各教科の工夫により各科目の内容や授業形態について十分な説明が行われた上で、各学年とも授業が運営されていると考えられる。

<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「教職員による学校評価項目 2・3」のによると、73.0%と 83.4%の教職員が肯定的に回答している（集計表 1 ページ）。今後は、これを「十分に実現できている」に改善していく工夫が必要である。 ・「保護者による学校評価項目 2」および「生徒による学校評価項目 1」のによると、保護者の 19.8%、生徒の 16.9%が現在の教育課程に満足できていない様子が見てとれる（集計表 3～8 ページ）。この評価結果に至った原因を探り、改善策を講じることが求められる。 ・「生徒による授業評価項目 9」のによると、全ての教科で「学習計画」に関して 90%以上の肯定的な評価をしているが、約半数は「やや思う」となっている（集計表 9～28 ページ）。今後は、これを、「そう思う」に改善していく工夫が必要である。
<p style="text-align: center;">改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「教職員による学校評価項目 2・3」の評価を「おおむね実現できている」から「十分に実現できている」に改善していくためには、現行の教育課程を基本としながらも、新しい大学入試制度の動向を踏まえつつ、生徒の進路希望を的確に把握しその実現を図っていくために、3年間の見通しを持って指導にあたりるとともに、必要に応じて3年選択科目の調整・変更などの検討を継続的に行っていく。 ・「生徒による学校評価項目 1」および「保護者による学校評価項目 2」に関わる課題については、引き続き <ol style="list-style-type: none"> 1) 本校の教育課程が、大学入試改革の動向を踏まえ、生徒全員の学力伸長と高い教養・実践力を備えられるようなものになっているか点検を繰り返し、全教職員で客観的データに基づいて取組む体制をとる。また、学年集会や保護者会・個人面談などを通じて今まで以上に丁寧に説明し、理解を得ることも必要である。 2) キャリア教育の充実を図るとともに、各科目の学習内容や年間計画を早い段階から提示することで、進路変更や安易な科目選択が行われないような指導体制を構築する。また、系統別選択システムを取り入れ、より理解されやすいよう工夫し、進路変更などの重大な理由による選択科目の変更希望があった場合にも対応できるよう、十分検討し、それに合わせた指導体制を確立する。 といった改善策を継続的に進めていく。 ・「生徒による授業評価項目 9」の「学習計画」について、「そう思う」を増やすために、教科ごとにはなく、各教科間で共通理解を図った横断的指導体制でバランスよく学習を進めさせ、改善につなげる。

■教科指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 4, 5, 6、生徒授業評価 1～15)

国語科

<p>取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。 ・国際社会、地域社会の一員として、課題解決に向けた論理的思考力と表現力を育てる。さらに、幅広い読書活動を通して、感受性と想像力を養い、生涯にわたって豊かな人間性をはぐくむ態度を育てる。 ・日常から教科内で情報を共有しながら授業や学習内容について研究を深め、進学指導重点校として生徒の学習活動がより良いものとなるように、担当者間で連携を図りながら指導に取り組んだ。
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「そう思う」と「ややそう思う」の合計の割合を見ると、「自分自身について」の中の「2 理解度」と「3 参加態度」では80%以上、「授業や先生について」と「授業内容について」の中の「15 授業速度」を除いたその他の項目ではすべて90%以上となっている。また、授業内容についてでも、すべての項目で90%前後という、全体的に高い評価となっている。 ・学習内容の精選、学習内容に応じた授業形態と授業展開の工夫、学習プリントの活用などに、教科全体として継続的に取り組んできたことが評価の向上につながったと思われる。
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「授業内容について」の「12 指導技術（力がつく授業になっているか）」の項目で「そう思う」の回答が36.9%と、全体と比較するとやや評価が低い結果となっている。また、「自分自身について」の項目では、「1 学習意欲」が「そう思う」19.0%、「2 理解度」が「そう思う」19.5%、「3 参加態度」が「そう思う」26.2%となっている。 ・生徒の理解度を更に高め、生徒の学習意欲を一層高めることが課題である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の興味や関心を高めるべく、教科として、学習内容や使用教材の精選、学習計画の作成、授業展開や授業形態の工夫、指導技術の向上に取り組む。 ・継続的な小テストの実施や学習プリントの活用などによって、学習内容の定着を図るとともに、生徒の学習状況の把握に努め、特に理解が不足している生徒に対しては、学習方法についての助言、学習課題の活用、補習の実施などによって学習活動を支援する。また、生徒が質問しやすい雰囲気作りにもつとめ、自ら学び、自ら課題を解決する姿勢を養いたい。

地歴公民科

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地歴公民科では、週一回の教科会において、科目の担当者ごとに授業進度および内容の打ち合わせをおこない、教材や情報の共有をはかりながら、授業研究をすすめてきた。 ・定期試験の範囲は科目間で共通認識を持ちながら、試験範囲の確認や問題の中身まで検討して、生徒にとって適する問題作成に力を注いできた。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の授業評価において、「授業や先生について」の質問項目においては、すべての項目でおおむね高い評価を得た。また、「授業内容について」も同様に評価を得ている。指導技術の質問項目では、他項目にくらべて多少評価が下がったが、前年度よりも大幅に改善している。引き続き、板書やプリントの活用、思考力を試す場面、活動的な場面に対する工夫につとめていきたい。 ・教科会で授業の様子について情報の共有を続けると共に、生徒に対して丁寧な指導を続けていることは、上記の評価に如実に現れているといえる。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の「自分自身について」の質問項目では、各科目通じて学習意欲の低いことが指摘されるが、地歴公民科では他教科のような宿題を頻繁にだすことは少ないため、真面目な生徒が、予習復習をもって授業に意欲を向けていないと回答している場合が令和元年度も多かった。つまり、生徒の教科・科目に対する意欲は標準的に「ある」と捉えられる。 ・指導技術については前年度よりも改善が見られた。引き続き、教材研究による指導技術の向上が課題である。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度よりも指導技術などで成果があがった。引き続き、積み上げてきた指導の方法と、時代が求める能動的な学習活動の導入にどのような単元が相応しいか、また、どのような授業実践を参考としていくかなどで、改善策は絞られる。 ・教科内における話し合いを大切にして、生徒がより効果的な学習を生み出すことができるよう、授業改善をめざしていく。

数学科

取組	<ul style="list-style-type: none">・進学指導重点校として、数学における基本的な概念や原理・法則の体系的な理解を深め、事象を数学的に考察し表現する能力を育て高い学力を身につけさせるために、基礎から応用問題や発展的学習まで幅広い授業を心がけた。・各科目の指導において、学力がしっかりと定着するように、小テストや課題、机間支援など常に生徒の状況を把握し、理解が進んでいない生徒に対しては、課外補習なども実施し、基礎学力の向上に努めた。指導内容に関しての教員間の情報交換も、週に1回の教科打合せを実施し、指導水準や進度を確認、長期休業中などは学年毎に統一した課題を用意し、指導の偏りをなくすように努力した。・校外の教科研修・研究会への参加をお互いに呼びかけ授業改善に生かした。授業見学週間内に限らず、お互いの授業を見学し合いながらの授業改善にも取り組んでいる。グループ学習やペアワークを取り入れて、お互いに教え合ったりする環境をつくることで、授業に意欲的に取り組めない生徒の数を減らし、底上げをし、理解度の高い生徒も教え合う環境の中で、知識の整理ができ、安定した学力につなげていけるようにした。また、ICT機器も活用しながら授業改善にも取り組んでいる。
成果	<ul style="list-style-type: none">・自分自身についての項目で、数学の授業内容を理解できていないとした生徒が、平成30年度は25.0%、令和元年度は20.5%と減少傾向にあり、80%の生徒は学習内容が理解できている。さらに、平成30年度の学習意欲が約73.4%、参加態度が約81.4%に対して、令和元年度は学習意欲約76.8%、参加態度が約87.6%と積極的、意欲的な回答が多く、あきらめずに、努力をしている生徒が増加している。・授業や先生についての項目で、学習評価及び学習計画については平成30年度ではそれぞれ92.3%、90.1%、令和元年度では94.2%、92.2%と高水準を保っている。これは、教科内で教員間の連携を密にし、年度当初に説明した計画通りに授業を進め、公正公平に評価していることを示している。・授業内容の項目で、「力がつく授業になっている」「理解を深める授業になっている」としている生徒は、平成30年度は80.5%、79.6%、令和元年度は81.2%、81%と例年並みである。・学習水準を高め設定しており、教科として授業改善に取り組んでいるので、授業評価の結果は納得できる。グループ学習やペア学習によって、授業への参加が意欲的でない生徒は減ってきている。

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数学という教科の特性から、学習内容が中学からかなり難化する高校では、学習意欲が低下する生徒が多くなる傾向があるが、上でも述べたが授業内容を理解できていないとした生徒は減少している。ただ、数学の学習に対して苦手意識をもっている生徒は多く、学力はありながら自信を持ってないでいる生徒もいる。学年全体として指導するなどケアをしつつ生徒にもっと自信をつけさせるような助言を与えていくこと課題である。また、生徒がより主体的に学習していくために、教員間で授業力向上に向けた研修・研究を重ね、さらにその情報交換を進めていく中で、グループやペアで学習していく際の授業展開や、教材の難易度、量などより成果を上げる方法などの工夫・検討は引き続きしていく必要がある。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「わかる」ことと「できる」ことは異なり、分かってもそれができるようになり、かつ、さらにそれが定着することとは別のことである。生徒が主体的に学習する中でより多くの「わかった」をより多くの「できた」に変え、成功体験を多く実感させ、定着させていく取り組みが必要になってくる。しかし、ただ易しい課題に取り組ませるのではなく、指導水準を低下させることなく、丁寧なきめ細かい指導と授業の雰囲気作り、適切な教材、ICT活用、適切な評価は大切であり、ペアワーク、グループ学習用の教材や進め方など、授業デザインの工夫と内容の規準の統一を教科会等で確認しながら継続的に授業改善を進めていかなければならない。

理科

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 理科が「役に立つ」、「楽しい」と答える生徒の割合は PISA2015 の結果からも依然として低く、横浜市立桜丘高等学校においても生徒の関心および意欲の向上が平成 30 年度の課題として挙げられていた。そこで、生徒の興味や関心を高められるような教材の研究を行い、それらの実践成果または課題を教員間で情報交換し共有するという取り組みを実行した。具体的には、生徒自身が観察、実験により探求の過程を通じて課題解決に励んだり、新たな課題を発見したりする経験を増やしていくという取り組みである。学習の質を高められるよう配慮し、いたずらに知識のみを問うようなことは避け、解法の暗記などのテクニックを評価するものにならないよう、授業のみならず試験においても工夫をした。知識基盤社会を生き抜くために必要となる主要能力（生きる力、資質能力）を育むため、主体的で対話的な深い学びのある授業づくりを意識し、レポートやプレゼンテーションを通じて記録・要約・説明・論述といった言語活動の充実が図られるよう工夫を行った。
----	---

<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前述の「取組」によって、「授業内容について」の項目 No. 14「生徒が思考する場面、活動する場面を設けている。」において、「そう思う」と回答した生徒が 89.2%を占めた。そして、「自分自身について」の項目 No. 1「意欲的に学習に取り組んだ。」において、「そう思う」および「ややそう思う」と回答した生徒は 72.5%であった。これは平成 30 年度の 71.8%から 0.7 ポイント増加しており、継続した授業改善の取り組み成果といえる。また、項目 No. 3「主体的、積極的に授業に参加している。」においても同様であり、平成 30 年度の 82.8%から 4.8 ポイント増加し 87.0%となっている。受動的な学びが中心のティーチングから離れ、能動的な学びであるラーニングの姿勢をもって取り組むことができるよう、授業に工夫を行った成果と考えたい。 ・ 「授業や先生について」の項目においても、「そう思う」と回答した生徒が平均 95.3%を占めており、学習の質を高めるという令和元年度の「取組」の成果と考えたい。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 令和元年度の「授業や先生について」および「授業内容について」の全項目で、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた好意的な回答が 9 割を超えている。一方で「自分自身について」の 3 項目は、平成 30 年度からの改善がみられたとはいえ、他の項目に比べ依然として少ないと言える。引き続き学習意欲の向上を目指した授業改善の取り組みを進めていく必要がある。理科では現象を、数式や記号を用いて表現することが多く、数学に対して苦手感覚をもつ生徒のケアも重要な課題の一つである。科学本来の学問的魅力に到達する前段階で学習を諦めてしまう生徒も少なくない。また、今の学びの延長にあるビジョンを持たせることも課題の一つである。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 30 年度からの取組による改善を受けて、授業改善の研究を継続して行っていく。数学で扱う微積分学や線形代数学などの解析数学と科学技術との関連にも要所で触れ、教科横断的な視点で意欲向上の相乗効果を図る。数学の授業進捗に関する情報交換も教員間で密に行うよう心掛ける。また、夏期講習を含めた補習ならびにレポートのきめ細やかな添削を継続し、数学的困難さを感じている生徒へのケアを実践する。大学との連携も引き続き行い、先端科学の専門的な内容に触れる機会を設け、進学後の見通しをもたせることで学習意欲の維持向上および進路選択に関する動機付けを図る。

外国語科（英語科）

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すると共に、情報や考えなどを的確に理解したり、適切に伝えたりする能力を養う。 （具体的な取り組み） ○LL教室を活用し、能動的発表活動を踏まえた授業展開 ○ALTとのティーム・ティーキング[®]を充実させ、生徒が英語で自己表現やコミュニケーションを図ろうとする意欲と態度を養う。 ○意欲のある生徒および学習遅延者に対する指導の充実 ○外部検定試験対策の充実と大学入試対策としての補習強化 ○生徒が主体的・能動的に学習に取り組むことができる指導法の研究
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒評価項目「4. 生徒に知識・技能を身に付けさせようと、授業に熱心に取り組んでいる」の数値が、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて91.9%と高い評価になっており、コミュニケーション活動、指導法の工夫等、授業改善における生徒主体の授業等、教員の取り組みが生徒に伝わっている成果と考えたい。 ・そのほか授業や先生についての項目や授業内容についてもほとんどの評価項目において「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると85%以上であり、授業展開、評価の妥当性等、教員の取り組みが機能している成果と考えたい。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒評価項目「1 学習意欲」の「あまりそう思わない」「そう思わない」をあわせると21.2%、「2 理解度」の「あまりそう思わない」「そう思わない」をあわせると16.0%であり、平成30年度とほぼ同様の結果であった。各学年でケアをしつつ、生徒にもっと自信をつけさせるような助言を与えていくことが課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の意欲向上・学力向上を図るため、教材の導入、アクティブラーニングなどの指導方法の研究をさらに推し進め、実践する。また、個々の教員が英語力の向上に努め、それらを活かした質の高い、工夫した授業展開ができるように努める。新テストに向けて、4技能入試対策も視野に入れた指導を引き続きしていきたい。

保健体育科

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・教師間の連携や他の市立高校との情報交換を行い、集団や状況に応じた授業内容や展開を常に研修している。それを活かして授業を行うことにより、現状に即した指導ができています。 ・目標の実現に向けて教師間で共通理解を図り指導計画を立てている。
----	--

成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・各学年とも「生徒の授業評価項目」では全項目においてほぼ 100%に近い数値の肯定的回答が得られており、取組みの成果が表れていると考えられる。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の時代による質の変化、教育課程の変更による内容の変化等に対応するため、研修を怠らず生徒に即した準備と、教師間の連携が必要である。 ・評価評定においては観点別評価の研究を継続する必要がある。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・新教育課程導入準備を継続し、スムーズに移行できるよう準備をする。 ・自分自身の心身の状態に目を向けさせ、他との関係に気づかせ健康への関心を高める。 ・運動の効用を示し、純粹に体を動かすことの楽しさ・爽快感、仲間との共同することの楽しさを体験させ、意欲の向上につなげる。

芸術科

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術の幅広い活動を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばし、芸術の魅力を発信できる力を育てる。 ・創作活動、表現活動、鑑賞活動を通して、世界の多様な芸術文化を理解し尊重するとともに、我が国の文化や伝統を大切にし、芸術文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。 ・芸術科として、各生徒の進路実現へ向けた適切な指導、多様な進路の紹介や相談の窓口としての機能を果たすよう、教科会で意識のすり合わせをしながら指導に取り組む。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術科では、評価項目（集計表 22 ページ）のほぼ全ての項目で「そう思う」「ややそう思う」が 90%を上回る回答を得ている。これは芸術科の授業展開として音楽美術書道と 3 分割で展開し、生徒が自身の興味関心に合わせて選択した上での履修となっているためと考えられる。また、授業や先生についての評価項目では、評価項目 6 「指導技術」（集計表 22 ページ）を除いて全ての項目で 90%以上の高い評価を得た。これは年間を通して教科会の中で音楽美術書道の 3 科目の教師が連携を取り合い、高いモチベーションの保ち、日々の授業に取り組めたことの成果だと言える。

<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身についての評価項目 2「理解度」（集計表 22 ページ）における「そう思う」の回答が 45.9%となっており、自身の理解度について他の項目と比べれば自信のない生徒が一定数いることを示している。 ・授業内容についての評価項目 15「授業速度」（集計表 22 ページ）における「そう思う」の回答が 42.7%となっており、授業展開の速度に不満を感じている生徒がいることが分かる。課題内容の再検討が必要であると思われる。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・各生徒の能力に応じた授業展開を心掛け、小さな成功体験を積み重ねさせることで芸術に対する苦手意識を持つ生徒のやる気を引き出し、積極的に授業に参加できるような雰囲気づくりを意識して日々の指導に取り組む。 ・授業中の生徒の表現活動を細かく観察し、授業内容を理解しているのかどうか重点をおいて評価をすることで、生徒の授業内容の理解度を高める。 ・全ての授業において、表現の分野と鑑賞の分野が表裏一体となった、現実生活に即した深い学びのある授業を展開していく。

家庭科

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本校が進学指導重点校として目指す生徒像は「多様化する社会の中で高い教養と思いやりをもとに主体的に、かつ、協働して活躍できる生徒」である。家庭科を「進学に関係ない教科」と捉える生徒もいるが、学びを進めていく中で、異なる価値観と出会い、グループで協力して課題に取り組んでいくことは、本校が目指す生徒像を実現するためには欠かせない。「自立」のために、また「健康的な社会生活をつくる」ために、必要な知識と技術の浸透・定着を意識しながら日々授業計画に取り組んでいる。 ・共通履修科目「家庭基礎」では、食物・被服・住居・家庭経済・消費生活・保育など生活全般にわたって実習やグループワーク、発表などを取り入れながら、自立して生活するために必要な基礎的知識や技術を育成している。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭科の生徒評価の結果から、「授業や先生について（4～10）」「授業内容について（11～15）」において「そう思う、ややそう思う」の数値を足すと全ての項目で 95%以上を達成しており、教科としての評価は高いことがわかる。その理由としては 2 年生の「家庭基礎」で、クラスを 2 分割し、きめ細かい指導を行っていることがあげられる。また、座学だけで終わらず、実習やグループワーク等、生徒が自ら考え判断し、学習を進める場面を多く取り入れているという点も評価の高さに結びついていると考えられる。

課題	<ul style="list-style-type: none"> ・評価項目2「理解度」については平成30年度より2.5%あがっているが、評価項目1「学習意欲について」は「そう思わない、あまりそう思わない」と答えた生徒が30%程度いることがわかった。実習には積極的に参加するが、知識中心の座学になると集中できない生徒もいるという点が、学習意欲の数値に影響していると考えられる。効果的な学習の動機づけについて更なる研修を重ね、生徒の意欲や興味・関心を高める授業を計画・実施していくことが課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・調理実習に限らず、実習に関しては積極的に取り組む姿が見られた。2時間連続という長所を活かし、知識中心の座学だけでなく、グループワークや実習というこれまでの取組みに加え、視聴覚教材の活用、学習内容を自分自身の生活と照らし合わせて考えさせる等、生徒のやる気や達成感、意欲につながる授業を計画していきたい。今後もひとりひとりに目を向けた丁寧な指導を行い、わからない生徒に対しては個に応じた指導を手厚くするなどして、生徒の学習意欲を高めていく。

情報科

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・教材を工夫し、生徒が興味関心をひく身近な話題を取り上げながら教科書を上手に使いながら授業を進めていく。そのためには授業の内容を精選し、生徒に考える時間や討論する時間、さらには発言する機会を増やしていく。またTTで授業を進めているので、一方で授業を進めている中でもう一方が生徒の授業に参加する様子を観察しながら声かけをして、理解の低い生徒を引き上げていくようにする。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の授業評価項目「5 学習のねらいに沿った適切な学習内容であり内容の組み立ても適切である」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて81.8%となっている。(集計表28ページ)学習内容を選び、生徒が興味を持ちやすい身近な事例を取り上げたりして授業内容を変更した結果がこの数値になったのではないかと。 ・生徒の授業評価項目「6 板書、プリント、教材の使い方は適切で効果的であり学習を推進する」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて82.7%となっている。(集計表28ページ)授業で生徒が理解しやすいようにプリントや説明用の教材を工夫して作成したことがこの結果につながっているのではないかと。 ・生徒の授業評価項目「10 発問や説明は適切である(指導技術)」の数値で「そう思う」と「ややそう思う」をあわせて83.8%(集計表28ページ)と好意的な数値を得た。こちらの項目も授業改善の研究の結果、授業内容の工夫と教科書と併用しながら授業を進めたことなどがこの結果として現れたのであろう。

課 題	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の授業評価項目「2 授業で学習した内容はだいたい理解または習得できている」の数値で「そう思う」の数値が15.0%と低く、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせても、この項目はあわせて66.2%となっているのでさらに研究して授業改善を図り、この数値を上げることが課題である。 生徒の授業評価項目「13 理解を深める授業になっている」の数値で「そう思う」の数値が23.0%と低くなっている。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせても、この項目はあわせて70.6%となっているこの項目は生徒の授業評価項目「2 授業で学習した内容はだいたい理解または習得できている」との関連が高いと思われる。より一層の授業研究が必要である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> 教材を精選し、常に新しい話題・内容を取り入れられるようにしておく。生徒が自分で考え問題解決をし、理解を深めることができる授業を行うために、今まで以上に生徒同士が話し合いをする時間を増やし、生徒が意欲的に取り組むことができ、能動的に学ぶ授業の組み立てを考える。またTTで進めていく授業形態をさらに有効活用して、生徒の活動をより細やかに観察し、アドバイスをしたり、また生徒からの質問を受けやすくする。

□特別活動・部活動の状況

(関連アンケート番号：教職員7,8、生徒3,9、保護者4)

生徒会指導部

取 組	<ul style="list-style-type: none"> 活動を通して生徒の自主的、実践的な態度の育成を目指す。 行事を通して、仲間と協力することの大切さを学び、学校生活の充実を図る。 部活動をとおして、生徒の自主的精神を育み、個性の伸長と人格の形成を図る。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> 全体としてみると、生徒会活動について生徒・職員・保護者からの理解は得られた。 桜高祭では5000人を超える来校者があったが、大きなトラブルもなく終えることができた。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> 委員会活動を行うだけの時間を十分に確保できない。そのための連絡行き違いや相互理解が不十分だった場面があった。それに伴い、7月の特別行事の内容変更については、結果として生徒の十分な理解を得ないままに実施することとなってしまった。 部活動を途中で辞めてしまう生徒が増加傾向にある。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒委員会において、4月からの動きをスムーズにするために、年度末までに次年度の見通しを立てておく。 ・学校全体で部活動の在り方を確認し、生徒が継続して取り組むことができるような工夫を行う。（活動日数・活動時間など）
-----	---

1 学年

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評価項目「8 生徒が人間関係を円滑に結び、充実した学校生活を送る基礎的な生活集団の形成に資するホームルーム経営を行うことができている。」では肯定的回答が 83.3%（集計表 1 ページ）であり、比較的高い数値を示している。また 1 学年の生徒評価項目「2 あなたはホームルーム（学級）で良好な人間関係を築くことができますか。」での肯定的回答 91.1%（集計表 3 ページ）、保護者評価項目「3 お子さんはホームルーム（学級）で良好な人間関係を築き、充実した生活を送っていますか。」での肯定的回答 89.6%（集計表 6 ページ）と、ともに高い数値を示しているが、すべての項目において 90% 以上の評価を得られるように取り組みたい。入学後の 4 月に校外学習を実施して学級内の交流をはかったこと、年間の学校行事を通して、協調性が高められたこと、複数回の面談を行い生徒理解に努めたことも奏功し、安定した学校生活を送っていると思われる。また保護者の多くからは日々の教育活動への理解を得ることができていると考える。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・1 学年の生徒評価項目「9 あなたは本校の生徒であることに誇りを感じていますか」の肯定的回答は 80.9%（集計表 3 ページ）と高い数値を示しているが、2 年次 3 年次と進級する中でさらに数値が上がるように、桜高生としての自覚をもたせ、高い意識で様々な活動に取り組めるように支援することが課題であると感じている。 また、保護者会や三者面談を通して、情報を共有し、本校の教育活動を理解してもらえるように努める。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・74 期生が校内の中心学年となる令和 2 年度、修学旅行や文化祭などの行事に自主的・主体的にとり組むことを通じて、積極性・団結心・いたわりの気持ち・責任感など、安定した学校生活を送るために必要な力を育む。生徒が穏やかに学校生活を送れる環境づくりに努め、生徒一人ひとりがしっかりと自己を見つめ自己実現をはかれるように、課題を学年職員で共有して、協力して課題解決に取り組む。

2 学年

<p>取 組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・ 進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・ 高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による学校評価項目「8 生徒が人間関係を円滑に結び、充実した学校生活を送ることができるよう基礎的な生活集団の形成に資するホームルーム経営を行うことができている」では肯定的回答が 83.3% (集計表 1 ページ) と比較的高い数値を示している。また 2 学年の生徒評価項目「2 あなたはホームルーム (学級) で良好な人間関係を築くことができているですか」での肯定的回答 94.0% (集計表 4 ページ)、保護者評価項目「3 お子さんはホームルーム (学級) で良好な人間関係を築き、充実した生活を送っていますか」での肯定的回答 93.6% (集計表 7 ページ) と、ともに高い数値を示している。日常的なホームルーム活動に加えて、面談指導を丁寧に行ったこと、修学旅行等の行事を充実した内容とすることができたことなどが奏功し、多くの生徒が仲間との連帯感を高めて学校 (学級) への帰属意識を強くもち、安定した高校生活を送っていると思われる。また、保護者からも日々の教育活動への理解を得ることができていると考える。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2 学年の生徒評価項目「9 あなたは本校の生徒であることに誇りを感じていますか。」の肯定的回答は 67.8% (集計表 4 ページ) という数値を示しているが、3 学年 (72 期) と比べると低い数値となっており、課題があると感じている。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最高学年となる来年度も、文化祭など様々な行事に対して自主的・主体的にとり組ませることで、積極性・団結心・いたわりの気持ち・自己肯定感など、安定した高校生活を送るために必要な力を育む。生徒が穏やかに学校生活を送れる環境づくりに努め、生徒一人ひとりがしっかりと自己を見つめ自己実現をはかれるように、課題を学年職員で共有して、協力して課題解決に取り組んでいく。

3 学年

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・進学指導重点校として、学習習慣の継続をはかり、一層の学力向上を目指すとともに、一人ひとりの進路実現に向けてきめ細やかな支援を行う。 ・自主自立の精神を養い、最高学年としての自覚と責任ある行動がとれるようにする。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度の教職員による学校評価項目「8 生徒が人間関係を円滑に結び、充実した学校生活を送ることができるよう基礎的な生活集団の形成に資するホームルーム経営を行うことができている」では肯定的回答が 83.3%と高い数値を示している。また、3 学年（生徒）の生徒評価項目「2 あなたはホームルーム（学級）で良好な人間関係が築くことができていますか。」の肯定的回答 92.3%、保護者（3 学年）評価項目「3 お子さんはホームルーム（学級）で良好な人間関係を築き、充実した生活を送っていますか」の肯定的回答 91.6%と共に高い数値を示している。これは生徒が学校生活を大切にし、また高校生活のなかで最後となる学校行事や部活動等の諸活動に学校の中心となって主体的に取り組めたことや、日々の学習活動、学級活動・教育相談等を通じて教員側との相互理解を深めることができ、より良好な人間関係が確立できた結果であると考えられる。また各家庭からも日々の教育活動への理解を得ることができていると考える。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・3 学年の生徒評価項目「9 あなたは本校の生徒であることに誇りを感じていますか」の否定的回答が 23.9%であることは決して低い数値ではない。これは学校生活にうまく適応できずに不安を抱えている生徒の存在があることも示しており、個々に応じた支援が不十分であったのかなど、分析を深め解決しなければならない課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人ひとりが進路実現に向けて学校生活を送るなか、学級担任や学年職員を中心として、教育相談など多くの面談を行っている。さらにきめ細かく一人ひとりに関わりを持ち、人間関係を築いていくことで個々の不安や悩みを解消できるよう、73 期職員への引継ぎをしっかりと行う。

2 教育活動の状況

(2) 生徒の状況

□生徒指導・教育相談の状況

(関連アンケート番号：教職員 9、生徒 2,4,5、保護者 5)

生活指導部

取 組	<ul style="list-style-type: none">▪ 生徒の基本的な生活習慣の確立と規範意識の形成を目指すため、学級や学年はもとより、様々な場面で学校生活における諸課題に対して注意喚起をおこない、指導してきた。▪ 遅刻・下校指導週間を年2回設け、職員全体で指導をおこなった。また、防火・防災意識を高めるため、以前からおこなわれている桜丘高校の防災計画を見直し、2回の防災訓練と防火に対する意識づけをおこなった。▪ 貴重品管理は自己管理の徹底として、学年や学級での呼びかけをおこなった。その他、バス乗車時のマナーや下校時の歩き方などについて、担任を通じて指導を徹底した。▪ 生活目標を毎月掲げ、ポスターとして教室や廊下に掲示し、月初めにクラスごとによる指導を行った。▪ 学校不適応を引き起こしている生徒に対しては、特別支援委員会やいじめ防止対策委員会および学年、教科担当、管理職と連携して、配慮や支援について検討した。保健室やスクールカウンセラーからも情報を得て参考とした。
-----	---

<p style="text-align: center;">成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <p>・教職員による学校評価項目「9 生徒の生活習慣の確立や規範意識の形成に向けて適切な指導をおこなうことができている」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると平成30年度は70.7%であったが、令和元年度は68.8%と少し下回った。保護者による学校評価項目「5 生活習慣や規範意識を身につけるための適切な指導がおこなわれていると思いますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると平成30年度は88.9%であったが、令和元年度は84.9%となった。特に大きく指導形態が変わっていない中で平成30年度を下回る結果となっているので、再度、全職員で指導形態や指導内容などを確認して、生活習慣の確立や規範意識の形成に向けての指導に取り組んでいく必要があると思われる。クラス、学年での取り組みに加え、生活指導部と全職員が協力して、遅刻指導や下校指導、その他の生活指導を組織的に進めているが、日常生活での生徒とのコミュニケーションをより増やしていけるように今後の活動に求めていきたいと考える。</p> <p>生徒による学校評価項目「2 あなたはホームルームで良好な人間関係を築くことができていますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると92.3%、同じく「4 先生はあなたの不安や悩み事などに親身になって相談にのっていますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると3学年全体で84.9%となった。この結果より、大方の生徒は良好な人間関係を築き、安心かつ安全で落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送られていると思われる。また、生徒と教職員の関係についても、おおむね信頼関係が築けていると考える。</p>
<p style="text-align: center;">課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> <p>・大方の生徒が平穏で落ち着いた学校生活が実現できている一方で、配慮や支援の必要な生徒が増えている。生徒による学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許させない環境づくりに努めていると思いますか」について、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせると81.0%であり、逆の見方をすると、約20%の生徒はそのように感じていないことがわかる。誰もが安心して安全に気持ちよく学校生活を送れるように、教職員と生徒、生徒間のコミュニケーションをとることのできる時間や場面を確保したり、職員間はもとより保護者や地域の協力も得て、情報の共有をおこない、組織で対応していくことが課題である。</p> <p>また、SNS関連の社会問題が押し寄せているこの時代に、学校現場で早くから生徒に対策や注意喚起を促す教育が必要であり、そのような場面を多くすることが課題といえる。</p>
<p style="text-align: center;">改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> <p>・課題解決のため、これまでの様々な取り組みのほかに、サイバー関連の諸課題に対処するための教育機会を検討していく。</p>

■進路指導の状況

(関連アンケート番号：教職員 10、生徒 6、保護者 6)

進路指導部

取 組	<ul style="list-style-type: none">・生徒の主体的進路選択・決定能力の育成・3年間を見通したキャリア教育の推進・「総合的な探究の時間」の積極的な運用・教職員が意欲を持って進路指導に取り組める組織運営ができるように、関係各所との連携も含めて改善を図っていく。・上記の目標達成のため以下のような具体的取り組みを行った。<ul style="list-style-type: none">○教職員向けの研修会を実施した。(キャリア教育、模試等のデータ分析・研究)○外部機関の情報を精査し保護者への情報提供を充実させた。○補習・講習を長期休業中に限らず、日常的に行い、学力の底上げを図った。○学年や各教科との連絡、連携の強化、情報の共有を行った。○自習室の利用促進を図り、環境整備を行った。○進路通信を発行した。○廊下の掲示板を活用し、情報を発信した。
成 果	<ul style="list-style-type: none">・生徒評価項目「6 あなたは進路説明会等で進路に関する情報を十分に理解できましたか」についても78.0%の生徒が肯定的回答を示した。(集計表3ページ)この項目は高い水準を維持できている。この数値は学年が上がるごとに上昇しており、指導の成果が表れていると考えられる。・保護者評価項目「6 進路希望に応じた情報の提供があり、適切な指導が行われていると思いますか」についても75.2%の保護者が肯定的回答を示している(集計表6ページ)。この項目においては生徒評価と同様には高い水準を維持している。・教職員による学校評価項目「10 生徒の希望する進路の実現に向けて、学校全体として適切に取り組んでいる」について、の肯定的回答が70.9%となり(集計表1ページ)、進学指導重点校としての指導を学校組織で取り組むという意識は維持している。
課 題	<ul style="list-style-type: none">・進路指導部と学年との連携や学年に所属していない職員との連携をさらに綿密にしていく必要があると思われる。・各教科との学習支援システムを構築し、幅広い進路選択が可能になるよう働きかける。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員が意欲を持って進路指導に取り組める組織運営ができるように、関係各所との連携や積極的な情報提供も含めて改善を図っていく。 ・生徒の興味・関心を広げることができるよう、教科横断的な学習を構築する。 ・生徒たちが自らもう一段高いレベルの目標をもち、生徒の能力が一段と引き出されるよう、教員は全国の高校の成功事例を研究したり、大学レベルでの研修や研究をも取り入れて実践に結びつける必要がある。
------------	--

□保健指導及び環境美化の状況

保健指導の状況（関連アンケート番号：教職員 11、生徒 7、保護者 7）

保健環境部

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・保健調査票や健康診断の結果から生徒の健康状態を把握し、学校生活を送る上で適切な対応が出来るように努めた。 ・保健だよりでの指導や、消毒液の配布など保健委員会を中心に感染予防の意識付けを行った。 ・学校薬剤師と連携し、水道水、プール水、教室の照度・CO₂濃度・浮遊粉塵などの検査を行い、学習環境の改善に取り組んだ。 ・日常の保健室での対応時には、けがや病気についての処置をしながら、生徒が自分で出来る対応法や予防法についての指導を行った。 ・生徒、教職員を対象に救急法講習会を開き、知識・技術の向上を図った。また、教職員を対象にアレルギー研修会を開き、エピペンの実技を含めてアレルギーへの知識・理解を深めた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価目標「11 学校保健計画に沿って生徒の健康管理を適切に行い、また生徒の健康に対する意識を喚起している」で「十分に実現できている」と「おおむね実現できている」を合わせた数値は 89.6%、生徒による学校評価目標「7 学校は生徒の健康管理について適切な指導をしていると思いますか」について「そう思う」「ややそう思う」を合わせると 76.9%、保護者による学校評価項目「7 生徒の健康に関する適切な指導が行われていると思いますか」について「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると 78.7%となり、評価は一定の水準を保っている。

課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「11 学校保健計画に沿って生徒の健康管理を適切に行い、また生徒の健康に対する意識を喚起している」では平成 30 年度が 89.6% 令和元年度が 89.6%である。保健に関する取り組みがある程度理解されてきたと考えられる。しかし、保護者による学校評価項目「7 生徒の健康に関する適切な指導が行われていると思いますか」では、平成 30 年度が 81.4%、令和元年度が 78.7%、また、生徒の「学校は生徒の健康管理について適切な指導をしていると思いますか」では平成 30 年度が 79.1%、令和元年度が 76.9%と下降している。生徒自身が自分の健康に対しての意識を向上できるような取り組みが必要だと考える。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの取り組みを基に、引き続き保健だよりによる集団指導や、来室時の個別指導などを通して、健康課題を踏まえた指導を行う。 ・学校環境衛生は、学校薬剤師と連携し、生徒や保護者に結果と取り組みを広くアナウンスする。 ・保護者に対しても学校の保健指導に関する取り組みを理解してもらえよう努める。

環境美化の状況（関連アンケート番号：教職員 12、生徒 8、保護者 8）

保健環境部

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が毎日の清掃指導、ごみ回収時の分別指導を行えるよう分担をし、校内の美化活動を行った。ごみの分別指導においては、分別の徹底を図れるよう保健環境部の職員が月 1 回入り技術員と連絡を取り合いながら行った。また、保健美化委員会にもごみの分別指導を行いクラスでの徹底を図った。 ・清掃用具の点検を保健美化委員の生徒と一緒にいき、大掃除の際に用具の交換補充を行った。 ・大掃除の際に洗剤、スポンジ、雑巾などの貸し出しを行いより細かい部分の掃除ができるようにした。 ・清掃業者に委託をし、全校舎のワックスがけを行った。 ・体育館やホールなどの広い場所についてはダスキンの委託をし、簡易に清掃ができるようにした。 ・カーテンの点検補充を行い整備に努めた。
-----	---

<p>成 果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「12 資源リサイクルなど省エネ行動に学校として適切に取り組んでいる」で「十分実現できている」と「おおむね実現できている」を合わせた数値は、令和元年度 83.3%、生徒による学校評価項目「8 学校は資源リサイクルや環境美化について積極的に取り組んでいますか」で「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、令和元年度 83.3%、保護者による学校評価項目「8 本校は学校環境美化に力を入れ校内の教育環境がきちんと管理されていると思いますか」では「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると、令和元年度 83.2%である。全体としては、平成 30 年度同様、取組が理解され実行されていると思われる。
<p>課 題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的な評価結果としては、教職員、生徒、保護者ともに 80%を超えおおむね理解されていると思われる。ごみの分別については徹底が図れるよう継続的な指導が必要であると感じられる。ごみの回収時にリサイクルできる紙やプラスチックごみが燃えるゴミに入っているなどがまだあり生徒一人一人が意識できるよう働きかけが必要であると感じる。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴミの減量化・軽量化を努力することが大切である。生徒・教職員が持ち込んだゴミについては、自宅に持ち帰らせることを徹底する。教室から出るゴミはもちろん、学校行事で出るゴミや部活動で出る資源ゴミなどは他の部署とも連携しながら、ゴミの減量化に努力するとともに分別をわかりやすくする工夫をしていく。 ・毎日の清掃活動の充実をはかる。特に生徒美化委員会の自主的活動を促し、学校全体で美化活動を推進する。 ・適切な清掃用具の購入と管理を推進する。

□いじめに関する状況

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5)

生活指導部

取組	<ul style="list-style-type: none">・平成 30 年度に引き続き、いじめ防止対策委員会を設置し、活動した。 ※(管理職、生活指導部主任、特別支援教育委員会、学年主任、養護教諭の計 9 名で構成)・本校の「いじめ防止基本方針」(平成 30 年 2 月)に沿って活動を展開してきた。・年間活動計画に沿って、生活指導部や特別支援教育委員会と連携しながら、生徒の状況把握につとめた。・12 月に全市統一の「いじめ解決のための生活アンケート」を実施し、速やかに集計して、データの分析と対応をおこなった。・毎月いじめ防止対策委員会を開き、生徒の状況把握とアンケートの分析および結果に関する情報を、全職員に周知徹底した。
成果	<ul style="list-style-type: none">・教職員による学校評価項目「28 いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止や早期発見、早期解決に組織的に取り組んでいる」について「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答は 85.4% の評価となった。また、生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「そう思う」「ややそう思う」の回答は 81% となった。・毎月実施した、いじめ防止対策委員会を中心に学級担任・各学年や生活指導部が連携していじめの早期発見・対応をすることができ指導することができた。
課題	<ul style="list-style-type: none">・生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、否定的な回答が 19% あった。 課題として、いじめや差別を許さない環境づくりを目指すべく学級活動や教科指導、生徒会活動など様々な場面を通じて、いじめに繋がるような動きを見逃さず、教職員が組織的に動く体制を構築することである。
改善策	<ul style="list-style-type: none">・課題解決のために、いじめ防止対策委員会を中心に教職員間の情報共有を迅速におこない、適切に対処していくことが必要である。・学校での生活において生活目標を意識できるような取組み(生活の目標など)を構築していくことも必要である。・教育相談(個人面談)などを通じて、生徒に寄り添いながら、生徒の悩みや相談に応じられる体制を、今後も大切にしていけることが重要である。・保健室やスクールカウンセラーからの個人情報も、取り扱いに注意しながら活用していく。

3 学校経営の状況

(1) 学校の管理運営等の状況

□教育目標等の設定・実施状況

(関連アンケート番号：教職員 13, 14、生徒 9、保護者 3)

管理職

取 組	<ul style="list-style-type: none">・進学指導重点校として、生徒・保護者の進路希望を実現できるよう、進路指導の充実を図るとともに、年2回の授業見学週間と授業改善研修会を実施し、職員全体での授業改善に取り組んだ。・学校行事・学級活動や部活動など、生徒の教科学習以外の面でも充実した学校生活となるよう、指導計画を工夫した。・大学入学者選抜改革に対する取り組みとして、民間外部定期試験「GTEC」の4技能検定を実施した。また、多面的・総合的評価への対応として学習支援システム「classi」を1・2年生に、「さくら手帳」を全学年に導入した。・桜 ESD 委員会を立ち上げ、主体的・対話的で深い学びを実現するための探究学習を1・2学年で計画的に取り組んだ。
成 果	<ul style="list-style-type: none">・「教職員による学校評価項目 13」において、「学校教育目標」に関し58.4%の肯定的回答を得た（集計表 1 ページ）。このことは、大多数の職員が学校経営方針を理解し、目標の実現に向け日々の業務に取り組んでいると考えられる。・「生徒による学校評価項目 9」および「保護者による学校評価項目 3」のデータでは、「そう思う」「ややそう思う」の数値がそれぞれ76.1%、90.4%という高評価を得た（集計表 3～8 ページ）。生徒が良好な人間関係を築き、学習面以外でも充実した学校生活を送っており、それを保護者も理解していることが見てとれる。
課 題	<ul style="list-style-type: none">・「教職員による学校評価項目 14」における「あまり実現できていない」「全く実現できていない」という「チームとしての円滑な学校経営」の割合を向上していくために組織的な工夫が特に必要である。・「生徒による学校評価項目 9」の問いに対し、否定的な回答をしている生徒が23.9%と全体の約4分の1を占めている。また、生徒・保護者の多様化しているニーズに、学校はまだ十分に捉えきれていないと考えられる。・学習支援システム「classi」及び「さくら手帳」の活用法等を教職員全体で理解し、効果的な運用をしていく必要がある。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な研修や会議を通じて職員の意味疎通を図り、全職員が一丸となって学校運営を行っていきけるような体制作りをする。 ・ 学年団や生活指導部、部活動顧問等を中心に、全職員がカウンセリングマインドを持って生徒に向き合い、適切に対応する。 ・ 学校評価やその他の生徒によるアンケート結果を分析し、その内容について、授業改善、部活動の在り方などの課題を職員全体で共有し、具体的な取組を各部署で行っていく。
------------	---

■組織運営及び教職員研修の状況

(関連アンケート番号：教職員 15, 16, 17, 18)

管理職

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各分掌、学年の主任及び主幹教諭によって構成される企画運営委員会において、本校の様々な課題や問題点を議論した。 ・ 教職員研修については、リクルート社の角田浩子様を講師に「新学習指導要領・総合的な探究の時間」をテーマにして、これからの社会に求められる学力や新学習指導要領についての情報の共有を図った。 ・ 令和元年度も6月と11月に授業見学週間を設定することにより、教員が相互に学びあう雰囲気醸成し、授業力の向上を図った。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前年度に完成した「学校ランドデザイン」に引き続き、各教科で「教科ランドデザイン」の策定に取り組んだ。本校に課された「進学指導重点校」としての使命や「桜丘らしさ」「学校の強み・弱み」といった議論を行うことができた。 ・ 10年次研修受講者によるメンターチームの取り組みに若手、中堅教員も加わり、これまでの経験に囚われることなく、積極的に新しい手法を授業や学級経営に取り入れて行こうとする姿勢と人材育成の観点が芽生えてきている。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本校の現段階における全ての課題や問題点について議論を尽くすことはできなかった。また、議論の成果を全体に浸透させる方策については課題を残すこととなった。 ・ 「働き方改革」の観点から、効率的学校運営に取り組み始めた。多忙な日常業務の中で業務の見直しを図り、更なる学習活動の充実を目指して、より一層の改善に向けた努力が必要である。評価項目18の「職員会議等」について、肯定的な回答が60.4%と改善が見られた。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員が同じ方向性を持って日常の業務に当たり、共通ビジョンをもって将来像を描くことができるための方策を研究する。 ・職員の授業力向上、研修機会増加を目指し、業務の精選、時間短縮、効率化を図る工夫が必要である。 ・働き方改革の観点からも、職員の働きやすい環境づくり、日常業務の軽減化に取り組む。 ・各分掌・学年等の取組状況が、全職員で共有できるような「見える化」が必要であり、問題点を共有し全体で解決していく必要がある。
-----	---

企画運営委員会

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・各分掌・委員会・学年等が学校の諸問題・課題を共有し組織的に対応できるよう、企画運営委員会の場が会議の議題整理だけではなく、学校運営上の現状と課題の認識及びその解決策を話し合う場として機能するように努めた。 ・令和元年度より分掌の組織再編が行われ8分掌を7分掌とし、分掌によっては仕事量のスリム化が具現化された。それによって仕事の効率化と分掌相互の関係の円滑化が図られた。 ・クラッシーを活用することにより、毎朝の打ち合わせや職員会議の効率化を図り、全職員の共通理解と各学年内の情報共有の意識を高めた。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の組織「働き方改革PT」から出された指針に伴い、朝の打ち合わせや職員会議の時間短縮が図られた。これは職員17「会議は効率的に運営されており、教育活動や学校運営の計画等の共通理解が図られる場となっている」に対する良い評価が、60.4%とここ3年間の中で最も高い数値になっていることにもあらわれている。 ・職員18「教職員が互いに研鑽し、力量を高めることができるように、校内の研究・研修体制が整えられている」に対する良い評価が、70.8%と高くなっている。これは本校組織「企画研究部」を中心とした職員研修が定期的に行われているためであると思われる。 ・職員16「各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行なわれている」の良い評価は77.1%であり、学年に対する情報共有が職員会議ごとになされているためであると思われる。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・職員15「一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」の良い評価はここ3年間 66.7%→60.3%→56.3%と年度を追うごとに低下している。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・令和2年度より管理職が主体となって校務組織改編を行う。

企画研究部

<p>取組</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員研修について、進学指導重点校推進のための業務として、次の4つの取り組みを行った。 <ul style="list-style-type: none"> ①授業見学月間の設定 ②各教科における研究授業 ③授業力向上研修 ④キャリア別研修会（メンターチーム等）
<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研修・研究に関する項目について十分できている・概ねできているとした回答は、平成29年度は75.7%、平成30年度は73.8%、令和元年度は70.9%と徐々に下がっているが70パーセント台は維持している。ただ、全く実現できていないとする回答は、平成29年度は4.5%、平成30年度は5.2%であったが、令和元年度は0%であった。 ・③2回の授業力向上研修においては、教科ごとではなく、教科を混合したグループをつくり、主幹教諭にまとめ役を依頼し、授業力向上に関する意見交換を行った。1回目の研修では戸惑ったという意見もあったが、2回目の研修では教科を超えた良い話し合いができたこと概ね好評であった。進学指導重点校研修で「新しい学びっていったい何？なぜ今なのか どんな力をどう育むか」というテーマでリクルートの角田弘子氏にして頂いた講演は好評で、社会の変化と未来に求められる力について知り、教員としてどのように生徒と関わっていく必要があるかのヒントを得ることができた。 ④メンターチームによる研修については、人材育成マネジメント研修等該当教員により企画・実施され、数回行われた。初任～5年目、臨任等を対象にミドル、ベテラン教員を交え、様々なテーマで意見交換をすることで有意義な研修であった。
<p>課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・研究・研修がまだ十分に実現できていないと感じている教員が3割程度いる。 ・①の授業見学に関しては、平成30年度の授業見学週間を見学月間とし、期間を長めに設定することで、より多くの教員が互いの授業を見学する機会を増やしたが、それほど大きな成果があったとは言えない。 ・校務スケジュールの過密さから、なかなか最適な日時を探すことができなかった。
<p>改善策</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事作成の段階で校務スケジュールを確認し、また、教員がどのような内容の研究・研修を期待しているかを調査し、早めに研修の実施に向けた計画を策定する。

1 学年

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・ 進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・ 高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による学校評価項目「16 各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行なわれている」については、肯定的回答が 77.1%と過去 2 年間との比較では低い数値となっている。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による学校評価項目「17 会議は効率的に運営されており、教育活動や学校運営の計画等の共通理解が図られる場となっている」「一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」についての、否定的回答が 40%前後の数値を示している。この結果が項目「16」を含めてマイナス的な要因であると感じる。この点を各学年及び全職員でよく精査し改善していくことが課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学年の情報を適切に発信し、全職員で共有することをさらに促進し、学校として全生徒を支えていく体制を強化していく。 ・ 働き方改革の観点から分掌、委員会等にさまざまな提案がなされることで、職員間の雰囲気が良くない面につながっていると感じる。協力し合い、気持ちよく仕事ができる雰囲気づくりを第一優先で実施していきたいと考える。

2 学年

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自主自立(自律)の精神を養い、高校生としての自覚のもとで責任ある行動がとれるように指導する。 ・ 進学指導重点校として、潜在能力を開発し、高い学力を育てる。 ・ 高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員による学校評価項目「16 各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行なわれている」については、令和元年度においては肯定的回答が 84.5%（集計表 1 ページ）と高い数値を示しており、情報を共有した円滑な学年組織の運営がおおむね実行されていると考えられる。

課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「15 一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」についての否定的回答が、39.6%と高い数字を示している。生徒個々が充実した高校生活を送ることを可能にする学校環境の形成には、教職員が意欲的・協力的に業務に取り組む体制が不可欠である。この点を各学年及び全職員でよく精査し改善していくことが課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・週に2回7校時が設定されているなど放課後に会議をもつことに適する曜日が限られている厳しい現状があるが、情報提供の機会や方法をより適切にし、組織運営の根幹となる教職員の情報共有と共通意識の醸成・優先されるべき課題の共有等を効率よく可能としていく体制の構築に努める。

3 学年

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・進学指導重点校として、学習習慣の継続をはかり、一層の学力向上を目指すとともに、一人ひとりの進路実現に向けてきめ細やかな支援を行う。 ・自主自立の精神を養い、最高学年としての自覚と責任ある行動がとれるようにする。 ・高校時代の諸活動を通して、豊かな人間性や社会に出て必要とされる力を育む。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「16 各学年の運営は、情報が共有され組織的取組が円滑に行われている」については、肯定的回答が77.1%と高い数値を示しており、3学年として協力的な指導体制を組むことでできており、高い教育効果を生む学年運営が行われていると考えている。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「15 一人ひとりの教職員が意欲をもって業務に取り組むことができる組織である」について、否定的回答が43.8%と低くない数値を示している。年を追うごとに教員の取り組むことが増加し、多忙感を感じるが多くなってきている点と合わせて、学校として背景や理由をよく調査・検討して改善に向けていくことが課題である。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・学年の情報を適切に発信し、全職員で共有することをさらに促進していく。また、課題については問題解決に向けて全職員で取り組む体制を確立していく。

□学校経理、施設・設備及び情報の管理状況

(関連アンケート番号：教職員 19, 20, 21, 22、生徒 10, 11、保護者 9)

予算委員会（総務＋事務）

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・公金、準公金は、学校配当予算執行要領等のマニュアルに基づいて、公正かつ適正に予算編成、執行、決算を行ってきた。 ・施設改修・修繕等は、生徒の安全、安心を第一に考え、関係部局と連絡調整を行って実施している。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・長年の課題であった校内の雨漏りについて、夏休み以降順番に各校舎や第一体育館の屋根の防水補修工事を行うことができた。また、施設改修要望の多かった第二体育館地下1階トイレについても補修工事を行い、利用が再開された。 ・進路指導部より長年要望されていた学級担任が教室での面談時に使用できるノートパソコンの配備を行うことができた。 ・各教科や分掌の協力のお陰で消費税増税に伴う対応が円滑に進み、後期に補正予算を組めたため、校内で不足した物品の購入を迅速に行うことができた。 ・アクティブラーニングをより充実させるために、どのような教材教具や施設が必要か、教師の意識調査を実施することができた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員による学校評価項目「19 予算委員会などの組織を設けて、予算が適切に立てられている」で、「十分実現できている」と「おおむね実現できている」を合わせた肯定的回答は91.7%、「20 公金、準公金ともに透明性が確保され、保護者や市民に対する説明責任を十分に果たしている」では93.8%と高い数値を得ているものの年々減少傾向にある。また、施設設備の管理でも、教職員による学校評価項目「21 教室、特別教室、体育施設等は学習や生活がしやすいように管理が適切になされている」も令和元年度は43.8%と同様の減少傾向にある。 ・今後、グラウンド整備をしていくための設計について、令和2年度教育委員会事務局予算を確保することができた。 ・台風による東・北校舎間のグリーンマット上部の天井の崩落や部室棟でのカビの大量発生などは老朽化施設から生じている問題でもある。 ・生徒や保護者からは自由記述欄に施設設備に関わる問題意識が多く挙げられているが、限られた予算の中では老朽化が目立つ物の更新に留まっている。生徒の学習環境を豊かにするためのICT環境の整備を委員会としては掲げながら、全教室にプロジェクターの配備の改修工事などは校内予算では実施することができず、教師側の評価が下がっている大きな要因と思われる。市の関連部局へのはたらきかけが重要と考える。

改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・施設整備の管理では、改修予算の制約もあるが、学習や生活がしやすいように、優先順位をきちんと考え、計画的な改修・修繕に取り組むことが必要である。また、関係部局に施設改修を継続的に強く要望をしていくことが必要である。
------------	---

3 学校経営の状況

(2) 保護者・地域等との連携協力の状況

■保護者・地域等との連携協力の状況

(関連アンケート番号：教職員 23, 24、生徒 13、保護者 10)

管理職

取組	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の特色である社会貢献活動として、学園通りコンサート・保土ヶ谷公園清掃・桜高 Week・がやっこレスキューなどを行った。 ・地域の小・中学校と連携を密に取り、部活動等の相互参加や生徒会活動の支援等により、協力体制を構築することに取り組んだ。 ・地域防災訓練や町内会行事に参加し、地域に愛される学校を目指した。 ・文化祭等の学校行事に、保護者が積極的に参加できるよう、環境整備に取り組んだ。 ・台風等の自然災害時には教職員と生徒ボランティアで学校敷地近隣の倒木掃除の地域貢献を行った。 ・ドイツ国際交流活動では同窓会や近隣の専門家と協力していただき、生徒・学校のグローバル化を推進した。
成果	<ul style="list-style-type: none"> ・毎年 10 月と 2 月に近隣の幼稚園、小学校、中学校との「学園通りコンサート」を合同開催し、学校間の連携を図ることができた。 ・教職員の評価項目「23 PTA との連携・協力推進」については、平成 30 年度よりは低い肯定的な回答が 91.0%となっており、PTA の活動も充実しており活発な活動ができている。 ・教職員の評価項目「24 学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」については、肯定的な回答が 93.7%となっており、ICT 機器等を活用した改善を実感してるが、同様の項目である「保護者 10」や「生徒 13」ではそれぞれ 79.9%と 78.0%とほぼ前年度と同等の数値となっている。 ・文化祭において、毎年行っている保護者主催のバザーを令和元年度も開催し、多くの来場者から好評を博した。

課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・地域行事への参加から好意的な認識を得ることができた反面、登下校時の歩き方やバス乗車時のマナーの悪さを指摘される事例があった。 ・学校の都合と地域の要望に差があることがあり、地域行事参加に苦慮する場面があった。 ・授業見学週間など、学校行事以外の場面には、あまり積極的な保護者の参加を得ることができなかった。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の登下校時のマナー向上に向け、生徒指導部を中心に引き続き注意喚起を促す。 ・地域・保護者との更なる信頼関係の深化を目指し、より丁寧な学校の情報発信をさらに充実させる必要がある。

総務部

取 組	<ul style="list-style-type: none"> ・地域主催の「学園通りコンサート」、本校主催の「桜高ウィーク」での地域公開事業や、地域のお祭りへのボランティア参加など様々な科活動を行っている。 ・保護者との意思相通を図るために、定期的な懇談会や面談、PTA主催の学年間の保護者の交流事業などの取り組みを行っている。
成 果	<ul style="list-style-type: none"> ・令和元年度の職員アンケート結果では、項目23「PTAとの連携・協力の推進が図られている」では91.7%、項目24「学校の教育活動の情報提供・説明が十分になされ、活動に対する理解が得られている」では93.8%、生徒項目13「学校は学校ホームページ及び学年便り等を活用し、保護者の必要な情報を提供していますか」では78.0%、保護者項目10「学校の様子を家庭への配布資料や学校ホームページなどを通じて十分かつ適切に伝えていると思いますか」では79.9%が良い評価であり、取り組みが良い方向に向いていると言える。
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携事業は3年間での「社会貢献活動」の時間数に結びついてきたが、この時間数を数える必要がなくなったので、連携事業の見直しが急務である。 ・学校ホームページを作成するにあたり、技術的な問題があり、企業等が提示しているようなレベルのものを作成することはできない。
改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・社会貢献活動に関しては、他校にない本校独自の取り組みであるので、このまま維持したいが、教員への負担増会にならないよう学校全体での取り組みとして持続できることに絞り、継続を図るようにする。 ・学校ホームページに関しては、保護者・生徒・中学生のニーズを把握し、技術的にできることを中心に更新を行う。

□危機管理の状況

(関連アンケート番号：教職員 25, 26、生徒 12)

防災委員会

取組	<ul style="list-style-type: none">・2回の避難訓練の内容・運営の充実をはかった。・エリア別集団下校班・学校留め置き班の名簿を作成した。・全校生徒での避難訓練、教職員及び生徒による校内避難経路の確認や集団下校エリア別集会を開いた。集団下校エリア別集会では、担当職員と生徒との打合せをおこない、非常時の際には各エリアの班長を中心に、生徒をまとめ迅速に行動することを確認した。
成果	<ul style="list-style-type: none">・教職員の学校評価項目「25 学校安全計画に沿って適正に実施されている」・「26 学校防災計画に沿って、緊急避難場所や避難経路・避難方法等の周知徹底がなされている」について、「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答が85～90%と高い評価結果となった。・生徒の学校評価項目「12 あなたは災害時の避難経路を知っていますか」については、理解していない生徒の割合が3学年全体で41.5%となり、防災・防火に対する危機管理の意識が低い結果となった。・上記の質問に対する回答では、1学年から順に63.7%→47.7%→28.4%の生徒が理解していないと答えている。学年が進むにつれて意識が高まっていることがわかる。
課題	<ul style="list-style-type: none">・入学初年度から2年目にかけての防災意識の向上と避難経路の確認を徹底することが課題である。・留め置き希望生徒の待機場所の確保、水や食料の確保について、防災委員会の検討課題とする。
改善策	<ul style="list-style-type: none">・教職員研修で、防災意識の向上・避難経路の確認（校内及びエリア別）を徹底する。・入学年度の学級での避難経路の確認と指導の徹底は特に重要である。・エリア別集会での下校経路確認と指導の徹底をはかる。また、各家庭内で、保護者との連絡経路の確認についても話す機会を設ける。・年2回の防災訓練で、内容を充実したものにしていく。・消防署との連携を令和2年度も継続していく。

□学校に関する情報公開の管理状況

(関連アンケート番号：教職員 27、生徒 13、保護者 10)

総務部

取組	<ul style="list-style-type: none">・学校ホームページを通して、様々な情報発信を行っている。また、保護者や生徒向けにはクラッシーや一斉メール配信などを利用し、発信を行っている。
成果	<ul style="list-style-type: none">・令和元年度データで、職員 27「募集に関する学校説明会や学校情報に関する広報活動が適切に行われている」は 93.8%、生徒 10「学校は学校ホームページ及び学年便り等を活用し、保護者の必要な情報を提供していますか」は 78.0%、保護者 10「学校の様子を家庭への配布資料や学校ホームページなどを通じて十分かつ適切に伝えていると思いますか」は 79.9%が良い評価をしている。学校説明会でのアンケートでは、学校ホームページの内容を確認して来校しているとのデータもある。
課題	<ul style="list-style-type: none">・インターネットでの発信技術は日々変化しているが、それに対するスキルが追いつかない状態になっている。保護者や生徒、中学生は企業などが作成している Web ページと学校を対比する場合もあるのでコンテンツの内容を充実させることが難しい。
改善策	<ul style="list-style-type: none">・外部に対して発信する Web ページに関しては、新しい技術を上手に取り入れ、さらに充実させる。・内部に対しては、クラッシーの活用を推進できるように、クラッシーを管轄する校内部署に要請を行う。

4 いじめへの対応に関する項目

■いじめへの対応

(関連アンケート番号：教職員 28、生徒 5)

生活指導部

取組	<ul style="list-style-type: none">平成 30 年度に引き続き、いじめ防止対策委員会を設置し、活動した。 ※(管理職、生活指導部主任、特別支援教育委員会、学年主任、養護教諭の計 9 名で構成)本校の「いじめ防止基本方針」(平成 30 年 2 月)に沿って活動を展開してきた。年間活動計画に沿って、生活指導部や特別支援教育委員会と連携しながら、生徒の状況把握につとめた。12 月に全市統一の「いじめ解決のための生活アンケート」を実施し、速やかに集計して、データの分析と対応をおこなった。毎月いじめ防止対策委員会を開き、生徒の状況把握とアンケートの分析および結果に関する情報を、全職員に周知徹底した。
成果	<ul style="list-style-type: none">教職員による学校評価項目「28 いじめ防止基本方針に沿って、いじめの未然防止や早期発見、早期解決に組織的に取り組んでいる」について「十分に実現できている」「おおむね実現できている」の回答は 85.4% の評価となった。また、生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、「そう思う」「ややそう思う」の回答は 81% となった。毎月実施した、いじめ防止対策委員会を中心に学級担任・各学年や生活指導部が連携していじめの早期発見・対応をすることができ指導することができた。
課題	<ul style="list-style-type: none">生徒の学校評価項目「5 学校はいじめや差別を許さない環境作りに努めていると思いますか」について、否定的な回答が 19% あった。 課題として、いじめや差別を許さない環境づくりを目指すべく学級活動や教科指導、生徒会活動など様々な場面を通じて、いじめに繋がるような動きを見逃さず、教職員が組織的に動く体制を構築することである。

改善策	<ul style="list-style-type: none">・課題解決のために、いじめ防止対策委員会を中心に教職員間の情報共有を迅速におこない、適切に対処していくことが必要である。・学校での生活において生活目標を意識できるような取組み（生活の目標など）を構築していくことも必要である。・教育相談(個人面談)などを通じて、生徒に寄り添いながら、生徒の悩みや相談に応じられる体制を、今後も大切にしていきたいことが重要である。・保健室やスクールカウンセラーからの個人情報も、取り扱いに注意しながら活用していく。
------------	---